

Title	程度を表す指示副詞について
Author(s)	岡崎, 友子
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2006, 46, p. 65-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3841
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

程度を表す指示副詞について

岡 崎 友 子

1. はじめに

現代・古代日本語の指示副詞には、以下のように様々な程度を表す語がある。⁽¹⁾

- (1) 南の島で見る天の川が、あれほど／これほど 綺麗だとは思わなかったよ。
- (2) 「田中くん、そんなに食べてばかりいると体をこわすよ」
- (3) かくばかり [如是許] 雨の降らくに ほととぎす 卯の花山に なほか鳴くらむ
(万葉, 巻10, 1963) (これほど雨が降るのに)

そこで、古代語（上代・中古）と現代語の程度を表す指示副詞をまとめると、表1・2となる。

表1 古代語（上代・中古）の程度を表す指示副詞⁽²⁾

カク系列	カ(ク) バカリ・カクノミ・カクモ・カクゾ等
サ系列	サバカリ・サシモ・サコソ・シカノミ等

表2 現代語の程度を表す指示副詞

コ系	コウ・コンナニ・コレホド・コレダケ・コレクライ・コノクライ等
ソ系	ソウ・ソナニ・ソレホド・ソレダケ・ソレクライ・ソノクライ等
ア系	アア・アンナニ・アレホド・アレダケ・アレクライ・アノクライ等

程度を表す指示副詞については、井上優（1992、現代語「コンナニ・ソナニ・アンナニ」）、服部匡（1994、現代語「サホド・ソレホド」）島田泰子（2005、近代語「コンナニ」）等の先行研究⁽³⁾があるが、これらは近現代の個々の語についての論考であり、すべての語を含む体系的な考察は未だなされていない。さらに、歴史的な研究については、ほとんど進んでいないのが現状である。

そこで本論は、まず現代語における程度を表す指示副詞の全体像を描き、またその意味・用法について考察をおこなう。次に上代から近代までの歴史的な変化を記述した後、程度を表す指示副詞を体系的に捉えることを目標とする。

2. 程度を表す指示副詞について

現代語の程度を表す指示副詞は、程度を表すシステムの違いから、以下の [I] [II] [III] の三タイプに分類することができる。⁽⁴⁾

[I] 指示副詞の持つ強提示機能により程度を表すもの

「コウ・ソウ・アア」

[II] 指示副詞の持つ感情的意味により程度を表すもの

「コンナニ・ソンナニ・アンナニ」(関西方言「コナイニ・ソナイニ・アナニ」)

[III] 副助詞の機能により程度を表すもの

「コレホド・ソレホド・アレホド」「コレダケ・ソレダケ・アレダケ」

「コレ(コノ)クライ・ソレ(ソノ)クライ・アレ(アノ)クライ」

岡崎友子(2003, 2004)では上記の [I] [II] 類について、以下の指摘をおこなった。

(4) [I] 類について

- a. [I] 類の「コウ・ソウ」(「アア」は近世から見いだせる)は歴史的に「カク→カウ→コウ」「サ→サウ→ソウ」と変化した語であると考えられるが、古代語(上代・中古)の「カク(カウ)・サ」は程度を表さない。そして中世末期には程度を表すものが僅かに見られるようになるが、まとめて見いだされるようになるのは近世以降である。
- b. 現代語の「コウ・ソウ・アア」は、形容詞等のように状態性をもつ語や、結果状態に程度性や量性をもつ動詞に係ると、強提示機能により程度を表す。

(5) [II] 類について

- a. 「コンナニ・ソンナニ・アンナニ」は近世後期以前には見いだすことができない。
- b. 「コンナニ・ソンナニ・アンナニ」は、「コンナ・ソンナ・アンナ」の持つ感情的な意味により程度を表していると考えられる。

なお [III] 類については岡崎友子(1999, 2004)で、上代(「カクバカリ」等)から現代(「コレホド」等)まで通じて見られることの指摘のみで、歴史的変化の様相や程度用法については未だ明らかとなっていない。

本論は現代語の [III] 類・古代語の①②③(①は [III] 類と同様に副助詞によるもの)を明らかにすることにより、程度を表す指示副詞を体系的に捉えることを目標とする。

そこでまず、本論に入る前に古代語・現代語の指示副詞の表す程度について整理しておく。

2.1 指示副詞の表す程度について

まず、指示副詞が表す程度についてまとめる。古代語・現代語の指示副詞は以下のような

程度・量の大きさを表すことができる。

[A] (状態・性質の程度) 形容詞・形容動詞 (現代語「大きい・静かだ」等)・連用修飾語 (現代語「急に・しっかり」等)・動詞 (現代語「似ている・曲がっている」等)の表す状態や性質の程度, また名詞 (現代語「美人・料理」等)の表す性質の程度や量。

(6) (形容詞・形容動詞の表す状態の程度)

- a. おほろかに 我れし思はば かくばかり [如是許] 難き御門を 罷り出めやも (万葉, 巻11, 2568) (これほど厳しい御門なのに抜け出してこようか)
- b. お相撲さんって, 直に見ると (こんなに/あんなに) 大きいんだ。

(7) (連用修飾語の表す状態の程度)

- a. ますらをと 思へる我れを かくばかり [如此許] みつれにみつれ 片思をせむ (万葉, 巻4, 719) (これほど疲れに疲れて片思いすることか)
- b. (そう/そんなに) 急に用を言いつけられても困るよ。

(8) (動詞の表す状態や性質の程度) この用法における動詞は, 金田一春彦 (1950) の第一種の状態動詞「(英語の会話が) できる・(このナイフはよく) 切れる」等や, 第四種の動詞「すぐれる・ずばぬける」等, また工藤真由美 (1995) の内的状態動詞「いらいらする・心配する」等である。

- a. さるは, わが心地にも, いと飽かぬ心地したまへど, 猫の網ゆるしつれば心にもあらずうち嘆かる。まして さばかり 心をしめたる衛門督は, 胸ふとふたがりて (源氏, 若菜上4, p. 142) (あれほど宮に心を奪われている衛門督は, 胸がいっぱいになって)
- b. 昨日, 山田君とお父さんに偶然会ったけど (ああ/あれほど) 似ている親子は珍しいね。

(9) (名詞の表す性質の程度や量) 指示副詞「コレダケ/ソレダケ/アレダケ」等+助詞「の」+名詞で, 名詞の指示対象が持つ性質の程度や量を示す。

- a. 忍びたれど, さばかりの御勢ひなれば, わたりたまふ儀式など, いと響きことなり。(源氏, 若菜上4, p. 55) (あれほどの御威勢であるから, ご訪問の儀式などは実にたいそう盛大である)
- b. (これくらい/あれくらい) の美人なら, いくらでもいる。

[B] (動作・作用の結果状態の程度) 「広がる・(日が) 暮れる」等の動詞に係り⁽⁵⁾, その動詞の表す変化の度合い (変化前と変化後の状態差) や漸次的に累加される変化状態の程度を表す。

(10) a. 三笠山 野辺ゆ行く道 こきだくも [已伎太久母] 荒れにけるかも 久にあらな

くに(万葉, 卷2, 234) (三笠山の野辺に行く道は, これほどまでも荒れてしまったのか, 時も経たないのに)

- b. ゲリラの占領地区が(ああ/あれほど)広がると, もはや国内を移動するのは不可能だね。

[C] (動作・作用の量) 動詞「食べる・走る」等や連用修飾語「何度も」等に係り, それらの表す動作・作用に関わる量を表す。([I] 類「コウ・ソウ・アア」は連用修飾語に係り動作・作用の量を表せるが(11c), 金水敏・木村英樹・田窪行則(1989)で指摘されるように動詞に係り, 動作・作用の量を表すことはできない(11b))

- (11) a. 玉の枝も返しつ。竹取の翁, さばかり語らひつるが, さすがに覚えて眠りをり。

(竹取, p. 40) (あんなに語り合っていたのに)

- b. (それだけ/そんなに/*そう) 食べても, まだ食べ足りないの?

- c. (あれだけ/あれほど/ああ) 何度も注意したのに, 彼はまた失敗した。

さらに, これらの指示副詞は以下のように, 表す程度の傾向「高程度・大きい量」「同程度・同量」によっても分類することができる。

- 高程度… [I] 類「コウ・ソウ・アア」
 (及び大きい量) [II] 類「コンナニ・ソナニ・アンナニ」
 (及び大きい量) [III] 類「コレホド・ソレホド・アレホド」
 「コレダケ・ソレダケ・アレダケ」
- 同程度・同量… [III] 類「コレクライ・ソレクライ・アレクライ」
 「コノクライ・ソノクライ・アノクライ」

また, 金水敏・木村英樹・田窪行則(1989)で指摘するように, 文脈によっては「コレダケ・ソレダケ・アレダケ」は「限られた・少ない」等の意味も表す(「コレッポッチ・ソレッポッチ・アレッポッチ」に置き換えることができる)。

- (12) (これだけ/これっぽっち)の収入で一家6人を養っていくのは並大抵のことではない。
 (金水敏・木村英樹・田窪行則1989:p. 93)

なお, 「限られた・少ない」等の意味を表す「コレッポッチ・ソレッポッチ・アレッポッチ」,⁽⁶⁾ また「コノ程度・ソノ程度・アノ程度」については, 紙幅の関係から本論では考察対象外とする。

3. 現代語 [III] 類・古代語①②③について

現代語・古代語の指示副詞について考察をおこなう。

そこで, 結論を一部先取りして述べておくと, まず現代語の [III] 類の指示副詞は, 副助

詞「ホド・クライ・ダケ」により程度を表す。この点で、指示副詞自体が持つ強提示機能〔I〕類、感情的意味〔II〕類で程度を表す〔I〕〔II〕類の指示副詞とは大きく相違する。

なお、「クライ・ダケ」は丹羽哲也(1999)で指摘するように、程度用法と取り立て用法がある。

- (13) a. (程度用法) こちらが恥ずかしくなるぐらい純情だ。髪の毛分だけ背が高い。
 b. (取り立て用法) 飯ぐらいゆっくり食べたい。早飯だけが取り柄だ。

(丹羽哲也1999: p. 93)

本論の〔III〕類「コレクライ・コレダケ」の「クライ・ダケ」も(13a)の程度用法と同様の機能であるが、筆者はこれらを「クライ(位)・タケ(丈)」というスケールを表す形式名詞として機能しているものとする(「ホド(程)」についても同様)。

なお、古代語に「カクノミ」の「ノミ」が限定として機能し、程度を表す例が見られる。これについては後で述べることにする。

- (14) かくのみし [如是耳志] 恋ひし渡れば たまきはる 命も我れは 惜しけくもなし
 (万葉, 巻9, 1769) (こうして恋し続けてばかりいると (=「こんなにも恋している」と)), 命も私は惜しくない)

次に、古代語には「カクバカリ・サバカリ」等の副助詞により程度を表す指示副詞だけでなく、「カクゾ・サコソ」等のような係助詞によるもの、また上代を中心に「ココバ・ソコバ」等の語も見いだせる。

そこで、3.2節以降の歴史的な考察においては、現代語の〔III〕類にあたる副助詞によるものを①、そして係助詞によるものを②、その他(ココバ・ソコバ等)を③とし考察をおこなう。

3.1 現代語の〔III〕類について

現代語の〔III〕類「コレホド・ソレホド・アレホド」「コレ(コノ)クライ・ソレ(ソノ)クライ・アレ(アノ)クライ」「コレダケ・ソレダケ・アレダケ」はすべて指示詞「コレ(コノ)・ソレ(ソノ)・アレ(アノ)」+副助詞⁽⁷⁾という構造をもつ指示副詞である。

では、〔III〕類の指示副詞はどのように程度を表しているのであろうか。

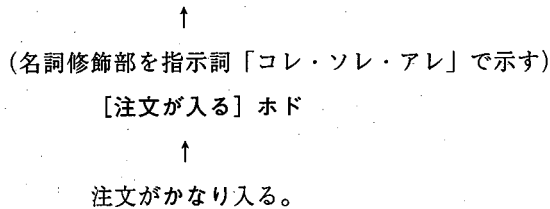
これについてはまず、江口正(2002)で提出された「副詞の関係節化」⁽⁸⁾に注目したい。江口正(2002)は、程度に関する副詞は「程度」という名詞によって関係節化できる場合があると指摘する。

- (15) [太郎が驚いた] 程度←太郎はひどく驚いた (江口正2002: p. 14)

江口正 (2002) では上記の (15) に示すような、関係節化された副詞における名詞「程度」はスケールのみを表し、この名詞に修飾部 (例15: [太郎が驚いた]) が付加されることにより特定の値が求められているとする。

同様に [Ⅲ] 類の指示副詞は (16) に示すように、スケールを表す形式名詞「ホド・クライ・ダケ」に、値を指定する要素である修飾部 (例16: [注文が入る] という事態) が指示詞「コレ・ソレ・アレ」で示された構造を持つものとする。

(16) 自分の作品がこれほど売れているのに、依然として私は貧乏だ。



なお、丹羽哲也 (1999) で現代語「ホド・ダケ」は高低程度を表す場合は、「ホド」が高程度を表し「ダケ」は限定的程度を表すとする。そして指示副詞の [Ⅲ] 類の「コレホド・ソレホド・アレホド」が高程度、「コレダケ・ソレダケ・アレダケ」が文脈によっては限られた程度を表す傾向を見せるのは、この性質に関係するものと考えられる。

また、「ホド・クライ」は (17) ように同じく同程度を表すが、指示副詞の場合は (18) のように、「コレホド」が高程度、「コレクライ」が同程度の意味に傾く。

(17) 春の大会 (ほど／くらい) の記録が出れば十分だ。

(18) (これほど／これくらい) の記録が出れば十分だ。

3.2 古代語の程度を表す指示副詞について

次に古代語 (上代・中古) における指示副詞の程度用法について考察する。

表3 上代における程度を表す指示副詞

上代	①副助詞	②係助詞	上代	③その他
カク系列	カクバカリ・カクノミ カクダニ	カクゾ カクモ	コ系列	ココダ・ココダク ココバク・コキダ
サ系列	シカノミ (シカバカリ) ⁽⁹⁾	シカゾ シカモ	ソ系列	ソコバ・ソコラク ソキラク

表4 中古における程度を表す指示副詞

中古	①副助詞	②係助詞
カク系列	カ(ク)バカリ・カクノミ	カウコソ・カクモ
サ系列	サバカリ	サコソ

表3・4に示すように古代語（上代・中古）の程度を表す指示副詞は、上代では①副助詞によるもの、②係助詞によるもの、③その他の3類が存在し、そして中古になると③が衰退し①と②の2類となる。

また、詳しくは6節以降に述べるが、さらに中世以降には②も次第に衰退し、そして①副助詞によるものが、現代語の〔Ⅲ〕類へとつながっていくこととなる。

では、各時代における程度を表す指示副詞について詳しく考察していく。

4. 上代の程度を表す指示副詞について

①副助詞によるものについて

上代において、①副助詞によるものに「カクバカリ」25例、「カクノミ」15例、「シカノミ」1例、また「カクダニ」5例が見いだせる。⁽¹⁰⁾

なお後で述べるが、3節で考察したように現代語の〔Ⅲ〕類を構成する副助詞「ホド・クライ・ダケ」はすべて、スケールを表す形式名詞として機能し程度を表すものと考えられるが、古代語（上代・中古）の「カクノミ・サノミ・カクダニ」の「ノミ・ダニ」は限定・極限のとりたてとして働くことにより程度を表していたと考えられる（「バカリ」は現代語の「ホド」等と同様に、形式名詞相当）。

（上代の「カクバカリ」）

まず、①の中で最も多く例が見いだせる「カクバカリ」について述べていく。

副助詞「バカリ」について小柳智一（2003）は、上代の「バカリ」は程度と概数量⁽¹¹⁾を表す形式名詞であるとする。

しかし、上代の「バカリ」が現代語「ホド」と近い機能（スケールを表す形式名詞）であったとしても、「バカリ」の修飾部は連用修飾成分「カク」、また「ホド」の修飾部は体言相当の「コレ・ソレ・アレ」であることを考えると、現代語の〔Ⅲ〕類と同じ構造は仮定しにくい。

但し上代の「カク」には「かくのごと [可久乃其等]」（巻20, 4304）のように、体言相当として働いているものも見いだせることから、(19)に示すような現代語の〔Ⅲ〕類と同様の構造である可能性もある。⁽¹²⁾これについては、今後の課題としておきたい。

(19) かくばかり [如是許] 恋ひむものそと知らませば（万葉，巻12, 2867）

↑

[他のことが考えられない] バカリ（現代語：ホド）

↑

他のことがまったく考えられない。

上代の「カクバカリ」は、例(19)のような内的状態動詞「恋ふ」に係るものが最も多く(13例、他「思ふ」「心を尽くす」が各1例)、次に形容詞「すべなし(20a)」等が3例、連用修飾語「みつれにみつれ(7a)」等が2例、その他は動詞(句)「見えずしある(20c)」1例、「(雨・雪が)降る(20b)」2例である。

- (20) a. (形容詞)(前略)来立ち呼ばひぬ かくばかり [可久婆可里] すべなきものか世の中の道(万葉, 巻5, 892) (こんなにも辛いものか世の中の道理というものは)
- b. (動詞) 打ち羽振き 鶏は鳴くとも かくばかり [如此許] 降り敷く雪に 君いまさめやも(万葉, 巻19, 4233) (これほど降り敷く雪に)
- c. (動詞) 夢にだに 見えばこそあれ かくばかり [如此許] 見えずしあるは 恋ひて死ねとか(万葉, 巻4, 749) (夢になりとも見えればそれでいいのに、こんなに見えないでいるのは、恋ひ死ねということですか)

つまり上代の「カクバカリ」は、動作や変化を表す動詞に係るものではなく、主に状態の程度(特に精神的な状態の程度)を示しているといえる。⁽¹³⁾(それに対し、後で述べるが③「ココバ・コキダ」等は様々な程度・量を示しており、上代における程度を表す指示副詞は③が中心であったと予測される。)

なお、上代の「カクバカリ」は現在の調査では、動詞・形容詞に係り高程度・大きい量を表すもののみである。(中古になると同程度・限られた程度を表す例が、見いだせるようになる)

(上代の「カクノミ」「シカノミ」)

小柳智一(2003)では、上代の副助詞「ノミ」は低程度と限定を表し、以下の(21a)「シカノミ」が低程度、(21b)の「カクノミ」が唯一の事態を限定する用法であるとする。

- (21) a. 庭に降る 雪は千重敷く 然のみに [思加乃未尔] 思ひて君を 我が待たなくに(万葉, 巻17, 3960) (庭に降る雪は千重に積もっている。その程度に浅く思って、あなたのことを私は待つのではないのだよ)
- b. 相見ずは 恋ひざらましを 妹を見て もとなかくのみ [本名如此耳] 恋ひばいかにせむ(万葉, 巻4, 586) (逢わなかったら恋することもなかっただろうに。あなたを見て、むやみにこんなに恋してばかりいたら、どうしようもなくなる。)(以上の現代語訳は、小柳智一2003より)

但し、小柳智一(2003)で「ノミ」の限定の機能は、集合から或る要素を一つだけ取り立てるものであり、また「ノミ」が表す事態は、何らかの意味で複数性が認められる場合が多いとするように、「ノミ」の限定は量性を持つ。

これについては丹羽哲也(1999)でも、現代語の「バカリ」は複数性を持ち、さらに以下

(22) では複数に留まらず連続量を表しているとする。

(22) 雨ばかり降っている。(丹羽哲也1999 : p. 96)

上代の「カクノミ」についても、以下 (23) 「どうして君(梅)は、こうして見ていてばかりいても飽かないのだろう」という唯一の事態の連続性が、「これほど見ても飽きないのだろうか」として(大きい)量として解釈されるものと考ええる。

(23) 梅の花み山としみにありともや かくのみ君は [如此乃未君波] 見れど飽かにせむ (万葉, 巻17, 3902)

なお、ここで確認しておくが、あくまでも上記の「カクノミ」は解釈の結果、程度・量を表すのであって、「ノミ」の用法はあくまでも「(唯一事態の) 限定」である。

また、上代の「カクノミ」には、上記のような唯一事態の連続性から量を表すものだけでなく、以下 (24) の「ただ~だけ」のように、単なる限定を表すものも見られる(程度に解釈できるもの15例, 単なる限定17例)。

(24) 世の中し 常かくのみと [常如此耳跡] かつ知れど 痛き心は 忍びかねつも (万葉, 巻3, 472) (世の中とはいつもこれだけのものだ知っているが)

(上代の「カクダニ」)

「カクダニ」は形容詞「(国の) 遠かば」(巻14, 3383)に係るもの1例, 内的状態動詞「(我れは) 祈ひなむ」(巻3, 379)等3例, 動詞「(妹を) 待ちなむ」(巻11, 2820)が1例の計5例見いだせる。

(25) かくだにも [如是谷裳] 我れは恋ひなむ 玉梓の 君が使を 待ちやかかねてむ (万葉, 巻11, 2548) (こんなにも私は恋慕っている)

古代語の「ダニ」について、高山善行(2003)で「極限」の取り立てであるとする。「極限」の取り立てとは、菊池康人(2003 : p. 87)で「極限的なことである」「普通期待されることを離れている」という意味を表すとされ、「カクダニ」も「カク」で指示する事態が期待または予想された程度以上であることを表していると考えられる。「ダニ」については、筆者はこれ以上述べる用意がなく、今後の課題としておきたい。

②係助詞によるものについて

指示副詞「カク・シカ(中古以降はサ)」が指示する事態を、係助詞「モ」「ゾ」(中古以降「コソ」)により強調(特立⁽¹⁴⁾)させることで程度を表していると考えられる。⁽¹⁵⁾

但し、係助詞「モ」「ゾ」「コソ」の機能はそれぞれ相違するものであり、またこれらの歴史的变化は係り結びの衰退も視野に入れねばならず、今後更に検討する必要がある。

なお上代には、5例(「カクモ・カクゾ」「シカモ・シカゾ」)⁽¹⁶⁾しか見いだせず、①③の指示副詞に比べ用例数は少ない。

- (26) 我がやどの 萩の下葉は 秋風もいまだ吹かねば かくそもみてる [加此曾毛美照]
 (万葉, 卷8, 1628) (秋風もまだ吹かないのに, こんなにも色づいている)
- (27) 高山と 海とこそば 山ながら かくも現しく [如此毛現] (後略) (万葉, 卷13, 3332)
 (山自体でこうもあざやかであり)
- (28) 風吹けば 白波騒ぎ 潮干れば 玉藻刈りつつ 神代より 然そ貴き [然曾尊吉] 玉
 津島山 (万葉, 卷6, 917) (神代以来 こうも貴い 沖の玉津島は)
- (29) 三輪山を 然も隠すか 雲だにも 心あらかなも 隠さふべしや (万葉, 卷1, 18)
 (三輪山をそうも隠すことか, せめて雲だけでも思いやりがあってほしい)
- なお現代語においても, 指示副詞「コウ・ソウ・アア」+係助詞「モ」等で程度を表すものが見られるが, 現代語では「コウ・ソウ・アア」はそれだけで程度を表すことができ, 以下(30)の程度は係助詞の機能によるものではない。
- (30) 財布を落とした上に道に迷った時には, 俺はなぜこうも運が悪いのかと思ったよ。

③その他

上代を中心に③その他として, コ・ソ系列「ココダク・ココダ・ソコバ」等の程度を表す指示副詞が見いだせる。⁽¹⁷⁾

- (31) a. (内的状態動詞) 思へども 験もなしと 知るものを なにかここだく [奈何幾許] 我が恋ひ渡る (万葉, 卷4, 658) (なんでこんなに私は恋つづけるのであろう)
- b. (形容詞) 海山も 隔たらなくに なにしかも 目言をだにも ここだ乏しき [幾許乏寸] (万葉, 卷4, 689) (海山も隔たっている訳ではないのに, 何でまたお逢いすることだけでも, こんなに少ないのでしょうか)
- c. (連用修飾) いでなにか ここだ甚だ [極太甚] 利心の 失するまで思ふ 恋故にこそ (万葉, 卷11, 2400) (これほどひどく精神の消え失せるほどに思うのか)
- (32) 咲ける盛りに 秋の葉の にはへる時に 出で立ちて 振り放け見れば 神からや そこば貴き [曾許婆多数刀伎] 山からや 見が欲しからむ 統め神の (以下省略)
 (万葉, 卷17, 3985) ((二上山は) ああも貴い)

そこで, ③その他の指示副詞の被修飾語(句)について, 以下の表5にまとめる。先にも述べたように③は①と違い, 「散る・照る・咲く・聞く・さわぐ・待つ」等の様々な動詞(表5: その他動詞)にかかり, その動詞の表す程度・量を示すものが見られる。

表5 ③の被修飾語(句)について

	内的状態動詞	状態を表す動詞(句)	形容詞	連用修飾語	その他動詞	計
コキダク				1	1	2
コキバク			1			1
ココダ	5		6	1	5	17
ココダク	7	1	2	3	5	18
ココバ		1	1			2
ココバク			1			1
ソコバ	1		1			2
ソコラク					1	1
ソキダク			1			1
	13	2	13	5	12	45

注) その他の動詞は「散る・照る・さわぐ・まがふ・荒る・咲く・とどむ・待つ・聞く・もる」、状態を表す動詞(句)は「おもふごとならぬ・寝らえぬ」である。

以上のように③は①②に比べ、被修飾語(句)のバリエーションもあり、用例に関しても45例と多いことから、上代では③が中心であったものと考えられる(奈良時代以前から用いられた指示副詞であると推測される)。

そして、中古になると③は「ソコバク」3例(源氏1, 更級1, 伊勢1例。但し表5に示すように「ソコバク」は上代には確例はない)⁽¹⁸⁾しか見いだせなくなる。

(33) かゝる事なむありし。來年の司召などは、今年この山に、そこばくの神集まりて、ない給(ふ)なりけりと見給へし。(更級, p.488) (「いく柱かの神」と「多くの神」の二つの解釈が可能)

以上のように、③その他の指示副詞は中古には衰退し、以下に論じるように①②が中心となる。

5. 中古の指示副詞について

中古には、上代に見られた③その他の指示副詞が見られなくなり、①では「カクバカリ」が変化した「カバカリ」、また上代では見られなかったサ系列「サバカリ」が中心に用いられるようになる。また中古にはサ系列「サコソ」等の指示副詞が現れ、上代ではあまり活発ではなかった②が、ある程度見いだせるようになる。

①副助詞によるものについて

(中古の「カ(ク)バカリ」「サバカリ」)

上代では高程度のみであった「カクバカリ」は、中古では「カバカリ」(僅かに「カクバ

カリ」が見いだせる)に変化し、また同程度・限られた程度を表すものも見られるようになる。さらに上代では見られなかった、「カバカリ(・サバカリ)」+助詞「ノ」+名詞という名詞に係る例も見いだせるようになる。

(34) (高程度)

- a. 御なやみにことつけて、さもやなしたてまつりてまし、など思しよれど、また、いとあたらしう、あはれに、かばかり遠き生ひ先を、しかやつさんことも心苦しければ (源氏、柏木4, p.302) (これほど末長い御髪の生い先を)
- b. さもかからぬ限なき御心かな、さばかりいはけなげなりしけはひをと、まほならねども見しほどを思ひやるもをかし。(源氏、若紫1, p.229) (あれほど幼げな様子だったのに)

(35) (同程度)

- a. かく年経ぬる睦ましさに、かばかり見たてまつるや、何の疎ましかるべきぞ (源氏、胡蝶3, p.188) (これくらいお近づき申したところで)
- b. わが身ながらも、さばかりの人に心分けたまふべくはおぼえぬものを (源氏、若菜下4, p.255) ((源氏は)あれくらいの男(柏木)に、宮が心をお割きになろうとは思われないのに)

(36) (限られた程度)

またここに御物語の程に、明け方近うなりにけり。「短の夜のほどや。かばかりの対面も、またはえしもやと思ふこそ。」(源氏、須磨2, p.175) (この程度の対面も、もう二度とできないのかと思うと。)

(中古の「カクノミ」)

上代と同じく「カクノミ」で程度を表すものが見られる。

- (37) からうじて今日は、日の氣色も直れり。かくのみ籠りさぶらひ給ふも、大殿の御心いとほしければ、まかで給へり。(源氏、帯木1, p.91) (これほど宮中に閉じこもってばかりいらっしゃるのも)

(中古の「カクシモ」「サシモ」)

「シモ」は助詞「シ」に係助詞「モ」が重なってできた複合助詞であるが、小林芳規(1969)に従い副助詞に分類する。副助詞「シモ」に関しては上代から例が見いだせるが、指示副詞「カク(カウ)シモ」「サシモ」は中古から見いだせるようになる。

- (38) a. あまりいとゆるしなく疑ひはべりしもうるさくて、かく数ならぬ身を見もはなたで、などかくしも思ふらむと、心苦しきをりをりはべりて (源氏、帯木1, p.71) (何だってこれほどまでに思ってくれるのだろうか)
- b. いみじうあだめいたる心ざまにて、そなたには重からぬあるを、かうさだ過ぐ

るまでなどさしも乱るらむ、といぶかしくおぼえたまひければ（源氏，紅葉賀1，p.336）（こんなにいい年になるまで，なぜああもふしだらなのかと）

但し，「シモ」は①における「バカリ・ノミ」等とは違い，小林芳規（1969）で「強く指し示す意」（p.493）であるとするように，次の②の係助詞によるものと程度の表し方は近く，②に分類すべきかもしれない。更に検討が必要である。

②係助詞によるものについて

中古の新しい変化としては，サ系列「サ」の出現とともに「サ」＋「コソ」等で，程度を表すものが見出せる。

(39) まづ一夜まいる。菊のこくうすき八（つ）ばかりに，こき掻練をうへに着たり。さこそ物語にのみ心を入れて，それを見るよりほかに行き通ふるい，親族などだにことになく（更級日記，p.511）（あれほど物語ばかりに熱中して）

また，上代から引き続き「カクゾ・カクモ」が見いだせる。

(40) からころも君が心のつらければたもとはかくぞそほちつつのみ（源氏，末摘花1，p.299）（あなたの冷たいお心が恨めしく思われますので，私の袂はこんなにも濡れどおしてございます）

(41) そのあまり，忍び忍び帝の御妻をさへ過ちたまひて，かくも騒がれたまふなる人は，まさにかくあやしき山がつを，心とどめたまひてむや」と言ふ。（源氏，須磨2，p.210）（帝の御妻とさえ間違いを犯されて，世間でこんなに騒がれていらっしゃる人）

しかし，指示副詞「カク（カウ）コソ」「サコソ」等は，常に程度を表すわけではない。以下の例に示すように（42b）は程度を表すが，（42a）は程度を表していない。これについては，文脈によるものと考えられるが，更なる考察が必要である。

(42) a. 入りたまひて，女君に花見せたてまつりたまふ。「花といはば，かくこそ句はまほしけれな。」（源氏，若菜上4，p.71）（花というからには，このようにおいが欲しい物ですね）

b. 御文ももろともに見て，心の中に，あはれ，かうこそ思ひの外にめでたき宿世はありけれ，うきものはわが身こそありけれ，と思ひつづけられるれど（源氏，濡標2，p.295）（ああ，こんなにも思いがけない幸運が世の中にはあるものだった）

6. 中世以降の指示副詞について

中世以降は引き続き①副助詞によるものと②係助詞によるものが見られるが，②は慣用表

現化し次第に衰退していく。

まず①について、中古に非常に多く見られた「カバカリ」「サバカリ」は中世前期以降衰退し、⁽²⁰⁾新しくコ・ソ・ア系列の指示副詞である「コレホド・ソレホド・アレホド」⁽²¹⁾が中世前期から見られるようになり、中世後期以降勢力を伸ばしていく。

また、中世にはカク・サ系列に属すると考えられる(44)「カホド」⁽²²⁾・サホド」も、僅かではあるが見いだせる。

- (43) a. あはれ、人の子をばもつまじかりける物かな。我子の縁にむすば、れざらむには、是ほど心をばくだかじ物を」とて出られけり。(平家、巻2小将乞請、p.167) (娘の因縁に束縛されないとすれば、これほど心を砕かないものを)
- b. 仲綱を呼うで、たとひ金をまるめた馬なりとも、それほどに人のこはうずるに惜しむことがあろうか？(天草版平家、巻第2、第3、p.116)
- c. いくらもなみ居たる人々、「あなおそろし。入道のあれ程いかり給へるに、ち(ッ)とも恐れず、返事うちしてたゝるゝ事よ」(平家、巻3法印問答、p.254)
- (44) いで∨さらは、うたひまひて、こうばい殿をすゝしめん、∨「かほどめでたきやうがうに、あふこそ我らもうれしけれど、(虎明本狂言、はちたゝき、p.142)

そこで、中世末期の資料である天草版平家物語と大蔵虎明本狂言における程度を表す指示副詞を以下の表にまとめておく。

表6 中世末期の程度を表す指示副詞

	コ・ソ・ア系列			カク・サ系列				
	コレホド	ソレホド	アレホド	カホド	サホド	サシモ	サノミ	サバカリ
天草版	24	2	2	0	1	16	4	4
虎明本	62	38	13	2	0	1	8	3

また、「コノクライ・ソノクライ・アノクライ」は近世後期、また「コレダケ・ソレダケ・アレダケ」については、近代以降に例が見いだせるようになる。

- (45) a. ハイわしが鈍な者でも此くらゐの事は能ふしつております。コレ此嶋の七五三をばこちらの方からよめば三五七といふ事 (洒落本、南遊記、p.179)
- b. ナンノマアそんな事が有もので我等は館へ直戻りでさやうな事はしらんでエス知らんもすさまじい大虚事を私が聞出さいでわいな寝た間も忘れぬ (洒落本、南遊記、p.173)
- c. [綾] 私も前廉読ましたが見かけてから下に得置ず終夜よみました [宗] 十七回

めから間違出し後のちが一向妙じや王元美ならずは逆あの位の妙文は書けぬテ（洒落本，昇平楽，p.67）

- (46) 旦那「あ ちょっと 番頭まってや。えらい これは変わって 面白いな。わしも これだけ 極道してるけど、電話で散財ちゅのは 初めや。」（落語，電話の散財，p.117）

また「コレダケ」は、高程度を表すもの（46）と同時に、限られた・少ない程度を表す例（47）も見いだすことができる。

- (47) 旦那「何程暑いもんか。まるきり 熱かったかて これだけ のもん。石川五右衛門（を）見てみい。煮え油の中へ 放り込まれて」（落語，やいと丁稚，p.159）

次に②については中世以降，以下（48）のような例も見いだせるが，（49）「サコソ」のように慣用的な表現へと偏り始め，次第に衰退していく。（また②が衰退した原因には，係り結びの衰退も深く関連しているものと思われる。これについては，今後の課題としておきたい）

- (48) 兵衛佐はかうこそゆゝしくおはしけるに，木曾の左馬頭，都の守護してありけるが，たちの振舞の無骨さ，物いふ詞つゞきのかたくななることかぎりなし。（平家，巻8猫間，p.139）（兵衛佐はこれほど立派であるのに）
- (49) 武士の下部共に衣裳皆はぎとられ，ま（ッ）ばだかでたゝれたり。十一月十九日のあしたなれば，河原の風さこそすさまじかりけめ（平家，巻8鼓判官，p.156）
（河原の風はさぞかし冷たく身にしみたことだろう）

以上のように，中古には③その他，また中世以降には②係助詞によるものが衰退することにより，①副助詞によるもののみとなる。そして，これが現代語に見られる〔Ⅲ〕類へとつながっていくこととなる。

7. 古代語①から現代語〔Ⅲ〕類への歴史的変化について

ここで古代語①から現代語〔Ⅲ〕類への変化と，副助詞の変化の関連性について検討する。①と〔Ⅲ〕類はともに副助詞により程度を表すものであることから，①から〔Ⅲ〕類への歴史的変化は，副助詞の変化に強く影響を受けてきたことが予測される。⁽²³⁾

そこでまず，先行研究における副助詞の歴史的用法・変化について以下にまとめる。

○「バカリ・ノミ・ダケ」の歴史的用法・変化について

（小柳智一2003：中古以前，宮地朝子2003：中世以降）

- (A) 上代の「バカリ」は取り立て以前の形式名詞であり，程度を表していた。また「ノミ」は，事物と事態の「限定」（あと，低程度・小時間量）をおこなっていた。

(B) 中古になると「バカリ」が事物の限定を獲得し、「ノミ」は事物の限定を失い事態の限定のみとなる。そして中世末期には「バカリ」は事態の限定を獲得し(事物・事態の限定を一手に担う)程度用法を失う。また「ノミ」は文章語として固定していく。

(C) 「だけ」は中世では、未だ「長さ」を表す名詞としての用法しか持たず、近世後期に「分限」(「分(量)」「~という立場・分際」)を表す用法を持つようになり、近世末期上方で事物の限定用法を獲得する。

○「ホド」「クライ」の歴史的用法・変化について

(阪田雪子1969:ホド, 倉持保男1969:クライ, 李妙熙1993:クライ)

「ホド・クライ」については先行研究があまりなく、明らかとなっていないことが多い。今後の調査・考察が必要であろう。

(D) 「ホド」は、中古には形式名詞化し、中世以降には体言に自由に接続するようになった(阪田雪子1969)。

(E) 「クライ」は、近世以降に副助詞化した(倉持保男1969, 李妙熙1993)。

そこで、副助詞及び①(〔Ⅲ〕類へ)の歴史的変化を以下の図1・2にまとめる。

図1 副助詞の歴史的変化

	上代	中古	中世	近世	近代
程 度	バカリ		(ホド)	(クライ)	
限定(事物)	ノミ				
(事態)		バカリ			ダケ
	ノミ		バカリ		
分 限					ダケ

図2 ①(〔Ⅲ〕類へ)の歴史的変化

	上代	中古	中世	近世	近代
① (〔Ⅲ〕)	カクバカリ				
	カクノミ				
			コレホド(カホド)		
				コレクライ	
					コレダケ

上記の副助詞 (A) ~ (E) の変化と、指示副詞①から [Ⅲ] 類への変化の関連性を、以下 (α) ~ (γ) に示す。

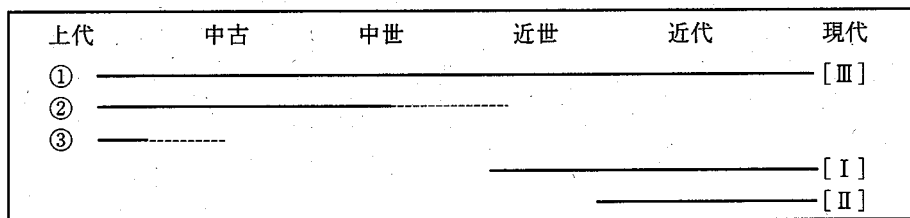
- (α) 上代「カクバカリ」(中古「サバカリ」)はスケールを表す形式名詞「バカリ」により、また「カクノミ」は「ノミ」の限定により程度を表していた (A)。そして中世には「バカリ」は限定を表す(取り立て)助詞化し、また「ノミ」は文章語としての固定したために (B)、「カ(ク)バカリ・サバカリ」「カクノミ」は中世以降形骸化し、次第に衰退した。
- (β) 「カバカリ・サバカリ」が次第に衰退した頃、スケールを表す形式名詞「ホド」(D)により、程度を表す「コレホド・ソレホド・アレホド」が用いられ始めた。これについては、副助詞の変化の影響だけではなく、指示副詞がカク・サ系列からコ・ソ・ア系列へと合流する流れも影響を与えたことが予想される。
- (γ) さらに近世には新しく形式名詞「クライ」(E)により、「コノクライ・ソノクライ・アノクライ」が、また近代には「分限・分(量)」を表す「ダケ(タケ)」(C)により、「コレダケ・ソレダケ・アレダケ」が用いられるようになった。

上記は、あくまでも仮説の段階であり、今後更に調査資料を広げ考察する必要があると考えられる。今後の課題としておきたい。

8. さいごに

以上本論で明らかとした上代から近代までの程度を表す指示副詞① ([Ⅲ] 類) ②③及び、岡崎友子 (2004, 2005) で明らかとした [Ⅰ] 類「コウ・ソウ・アア」[Ⅱ] 類「コンナニ・ソナニ・アンナニ」の歴史的变化をあわせると図3のようになる。

図3 程度を表す指示副詞の歴史的变化



注) 古代語：①副助詞によるもの、②係助詞によるもの、③その他

上代では①②③ (③が中心)であった程度を表す指示副詞は、中古では①②となり、中世以降②が衰退することにより、①のみとなる (そして現代語の [Ⅲ] 類へとつながる)。また中世末期には [Ⅰ] 類、近世には [Ⅱ] 類が新しく現れる。

上記のように②が衰退し、① ([Ⅲ] 類) のみになる時期が中世末期～近世であることと、

[I]類「コウ・ソウ・アア」,及び[II]類「コンナニ・ソナニ・アンナニ」が発生する時期が中世末期～近世であったことは、無関係ではないと考えられる。

これまで上代から近代までの程度を表す指示副詞について、歴史的な流れを記述し体系的に捉えることをおこなってきた。しかし、それぞれの語についての調査は未だ不完全であり、また指示代名詞や、その他の指示副詞との関係も含め、さらに詳細に考察する必要がある。各節で示した課題とともに、今後明らかとしていきたい。

註

- (1) 本論では表1・2に示した古代語・現代語の指示詞を含む語を、一語の指示副詞と考える。なお古代語と現代語の指示詞の系列名については、古代語は「カク・サ系列」(指示副詞)・「コ・ソ・ア系列」(指示代名詞)と、現代語「コ・ソ・ア系」(指示代名詞・指示副詞)とする。
- (2) 上代を中心に、「ココバ・ココダク・ソコバ」等の程度を表す語が見いだせる。古代語(上代・中古)ではこれらの語以外、語頭の音がコ・ソで副詞相当の働きをするものは見られない。本論では、これらの語をコ系列「ココバ・ココダク」等・ソ系列「ソコバ」等の指示副詞として扱う。これについては後で考察をおこなう。
- (3) その他に林奈緒子(1999, 現代語「コンナニ・ソナニ・アンナニ」), また程度を表す指示副詞のみを扱ったものではないが小柳智一(2003等・古代語「ノミ・バカリ」)がある。
- (4) 岡崎友子(2003, 2004)では全ての指示副詞を体系的に捉え、「コウ・ソウ・アア」をA類、「コンナニ・ソナニ・アンナニ」をD-1類,「コレホド・ソレホド・アレホド」「コレダケ・ソレダケ・アレダケ」「コレ(コノ)クライ・ソレ(ソノ)クライ・アレ(アノ)クライ」をD-2類と分類した。本論では、程度を表す指示副詞に焦点をあて論じることから便宜上、A類をI類, D-1類をII類, D-2類をIII類とする。
- (5) これらの動詞は佐野由紀子(1998)の指摘する進展性を伴う主体変化動詞である。
- (6) 「コレッポッチ・ソレッポッチ・アレッポッチ」は、「コレ・ソレ・アレ」+「ポチ(点の意味)」が一語化したものと考えられる。
- (7) 「ホド・クライ・ダケ」について、「ホド」は奥津敬一郎(1980)で「程度の形式副詞」,「クライ(グライ)・ダケ」は沼田善子(2000)等で「とりたて」とされるものである。また本論では[III]類の「ホド・クライ・ダケ」はスケールを表す形式名詞と考えるが、便宜上国語学の伝統的な分類に従い「副助詞」と呼ぶ。
- (8) 江口正(2002)によって提出された副詞の関係節化とは、(名詞としての性質をもつ)数量詞で副詞となったものが、再び関係節を作れるといったものである。副詞(例「三人」のような連用修飾語)は関係節化する場合そのままではできないが、その副詞の表す数量や程度

等を表す名詞を取ることにより関係節化が可能になるといったものである。

例：学生が三人来た。← [学生が来た] 人数 (* [学生が来た] 三人)

- (9) 万葉集中には「シカバカリ」と考えられるものが1例「然許」(万葉, 巻4, 631) (岩波(旧)日本古典大系, 塙書房の『万葉集』では「シカバカリ」とする) があるが, 新編日本古典文学全集 (小学館)・岩波新日本古典大系は「うはへなき ものかも人は かくばかり 遠き家道を 帰さく思へば」と「カクバカリ」する。このように「シカバカリ」は確例がないため, 本論ではこれ以上扱わない。
- (10) 上代の例については, 『万葉集各句索引』(塙書房)を基本とし, 本論中の例文は新編日本古典文学全集 (小学館)を用いた。
- (11) 小柳智一 (2003) は上代の「バカリ」について, 中古には見られる限定の用法が未だ見られず, とりたて以前の形式名詞であるとする。
- (12) 「かくさまに [可久左麻尔]」(巻15, 3761) のように, 連体修飾成分として働いているものも見いだせる。
- (13) 上代の「カクバカリ」に係る連用修飾成分は, 「みつれにみつれ (片思をせむ)」(7a) 「息の緒にして」(巻4, 681) と2例とも内的状態を表しており, また動詞句「見えずしある」(20c) も「(逢えないでいる) 状態」を表している。このように「降る」2例を除いて, 「カクバカリ」は状態の程度を示している。
- (14) 「特立」とは野田尚史 (2003: p. 3) で「コン」について, 「特立というのは, 前にくる成分を特に目立たせて示すというほどの意味である」とするものである。古代語 (中世以前) については森野崇 (2003) で, 「コン」の特立が考察されている。
- (15) 岡崎友子 (2003, 2004) で指摘したように古代語 (上代・中古) の「カク・サ」は「カク・サ」のみでは程度を表すことができない。しかし, 上代の「シカ」においては以下に示すように, 程度を表していたのではないかと考えられる例が1例ある。
- 例：高山と 海とこそば 山ながら かくも現しく 海ながら 然直ならめ [然直有目] 人は花ものそ うつせみ世人 (万葉, 巻13, 3332) (海自体であちちゃんとしているのだろう)
- (16) 「シカゾ」について塙書房『万葉集』では「然叙年而在」(万葉, 巻10, 2005) を「しかぞとしにある」とするが, 新編日本古典文学全集 (小学館) では「天地と分れし時ゆ己が妻かくぞ離れてある秋待つ我は」(天地の分かれた時以来, 我妻とこんなにも離ればなれに暮らしている) とする。
- (17) 「ココダ・ソキダ」等の「ダ」, 及び「ココダク・ソキダク」等の「ク」は副詞語尾とされる。(『時代別国語辞典上代編』三省堂)
- (18) 調査対象外ではあるが『宇津保物語』には「ソコバク」がある程度まともに見られる。なお「ソコバク」は, 築島裕 (1963: p154) で「「若干」は「ソコハク」と訓ずる」と指摘す

るように、中古には漢文訓読語となり中世でも引き続き用いられることとなる。

- (19) また、小林芳規 (1969) では助詞「シ」について、係助詞に機能が近いと指摘する。
 (20) 特に中世に入ると「カ (ク) バカリ」の例は激減する。また「サバカリ」も、中世以降あまり見いだせなくなる。

例：小太郎は足か (ン) ばかりはれてふせり。(平家、巻8妹尾最期、p.148)

(小太郎は足がすっかり腫れて)

例：大ぜいばつとより、さばかりまんずる大ひげを、大きなけぬきではさまれて

(虎明本狂言、ひげやぐら、p.276) (あれほど自慢する大ひげ)

- (21) この中でも「アレホド」が最も早く中世初期から見出せる。

例：「穴怖シヤ。入道殿ノアレ程ニ怒リ給テ宣ハムニハ、我等ナラバ、院ノ御所ニ有事、無事、コトヨシ事、申散シテ出ナマシ。」(延慶本平家、第二本、p.304)

- (22) 「カホド」については、「カバカリ」が「カ」+「バカリ」と再分析され、中世に程度を表す形式名詞化していた「ホド」に「カ」がつき、「カホド」が生み出されたとも考えられる(本来ならば「カク (カウ) + 「ホド」)。

- (23) 但し、上代・中古には「指示副詞 (カク/サ) + 副助詞」であったが、中世以降になると「指示代名詞 (コレ/コノ、ソレ/ソノ、アレ/アノ) + 副助詞」に変化する。この変化の流れは程度を表す指示副詞だけでなく、指示詞を含んだ接続詞(「サラバ」等から「ソレナラバ」等へ)の変化とも一致するものであり、指示体系全体の推移から考察される必要があると思われる。今後の課題である。

参 考 文 献

- 井上 優 (1992) 「指示表現を含む副詞成分の一特徴：「コ (ソ・ア) ンナニ」を例に」『都大論究』29, pp.13-22.
- 李 妙熙 (1993) 「近世における副助詞「くらい」の用法について—「ほど」とも比較を通して—」『国語学研究』32 (東北大学文学部), pp.11-25.
- 江口 正 (2002) 「遊離数量詞の関係節化」『福岡大学人文論叢』33-4, pp.2147-2167.
- 奥津敬一郎 (1980) 「「ホド」—程度の形式副詞」『日本語教育』41 (日本語教育学会), pp.149-168.
- 菊池康人 (2003) 「現代語の極限のとりたて」『日本語のとりたて—現代語と歴史的变化・地理的変異—』編者沼田善子・野田尚史, pp.85-105, くろしお出版.
- 金水 敏・木村英樹・田窪行則 (1989) 『日本文法セルフ・マスターシリーズ4 指示詞』くろしお出版.
- 金水 敏 (1999) 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『言語情報処理』vol.6 No.4, pp.67-91.

- 金水敏・田窪行則 (1992) 『日本語研究資料集第1期第7巻 指示詞』ひつじ書房, pp. 151-192.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15. (金田一春彦 (編) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房1976に再録, pp. 7-26.)
- 工藤 浩 (1983) 「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』明治書院, pp. 176-198.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト — 現代日本語の時間の表現』ひつじ書房.
- 倉持保男 (1969) 「ばかり — 副助詞 — <現代語>」松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』pp. 518-520, 學燈社.
- 小林芳規 (1969) 「ばかり・のみ — 副助詞 — <古典語>」「し・しも — 副助詞 — <古典語>」松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』學燈社, pp. 496-513, pp. 487-496.
- 小柳智一 (2000) 「中古のバカリとマデ — 副助詞の小さな体系 —」『國學院雑誌』101-12 (國學院大學), pp. 13-27.
- 小柳智一 (1997a) 「中古のバカリについて — 限定・程度・概数量 —」『国語と国文学』74-7 (東京大学国語国文学会), pp. 43-57.
- 小柳智一 (1997b) 「中古の「バカリ」と「ノミ」」『國學院雑誌』98-12 (國學院大學), pp. 13-26.
- 小柳智一 (1998) 「中古の「ノミ」について — 存在単質性の副助詞 —」『國學院雑誌』99-7 (國學院大學), pp. 14-28.
- 小柳智一 (1999) 「万葉集のノミ — 史的変容 —」『実践国文学』55 (実践国文学会), pp. 38-52.
- 小柳智一 (2003) 「限定のとりたての歴史的变化 — 中古以前 —」『日本語のとりたて — 現代語と歴史的变化・地理的変異 —』編者沼田善子・野田尚史, pp. 159-177, くろしお出版.
- 阪田雪子 (1969) 「ほど — 副助詞 — <現代語>」松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』pp. 555-557, 學燈社.
- 定延利之 (2001) 「探索と現代日本語の「だけ」「しか」「ばかり」」『日本語文法』1-1 (日本語文法学会), pp. 111-136, くろしお出版.
- 佐野由紀子 (1998) 「程度副詞と主体変化動詞との共起」『日本語科学』3, pp. 7-22.
- 島田泰子 (2005) 「連用における例示と程度 — コンナニ類の程度副詞化 —」『日本近代語研究4: 飛田良文博士古稀記念』ひつじ書房.
- 高山善行 (2003) 「極限のとりたての歴史」『日本語のとりたて — 現代語と歴史的变化・地理的変異 —』編者沼田善子・野田尚史, pp. 107-122, くろしお出版.
- 築島 裕 (1963) 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会.
- 丹羽哲也 (1992) 「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』第四四巻一三三冊大阪市立大学文学部, pp. 93-128.
- 沼田善子 (2000) 『時・否定と取り立て』岩波書店.
- 野田尚史 (2003) 「現代語の特立のとりたて」『日本語のとりたて — 現代語と歴史的变化・地理的

- 変異一」編者沼田善子・野田尚史, pp. 3-22, くろしお出版.
- 服部 匡 (1994) 「アマリ～ナイとサホド (ソレホド) ～ナイ」『日本語日本文学』第6号, 同志社女子大学, pp. 1-21.
- 林奈緒子 (1999) 「指示機能をもつ程度副詞に見られる制約について—「こんなに」「あんなに」「そんなに」を例に—」『言語学論叢』第18号, pp. 25-37.
- 松村明 (1958) 「副助詞—のみ・ばかり・まで・など・すら・さへ・ばし—」『国文学解釈と鑑賞』23-4, pp. 93-120, 學燈社.
- 宮地朝子 (2003) 「限定のとりたての歴史的变化—中世以降—」『日本語のとりたて—現代語と歴史的变化・地理的変異—』編者沼田善子・野田尚史, pp. 179-202, くろしお出版.
- 宮地朝子 (2005) 「形式名詞に関わる文法史的展開—連体と連用の境界として」『国文学解釈と鑑賞』50-5, pp. 118-129, 學燈社.
- 森重 敏 (1954a) 「群数および程度量としての副助詞」『国語国文』23-2, pp. 1-12.
(1954b) 「内属判断としての副助詞」『国語国文』23-7, pp. 1-12.
- 森野 崇 (2003) 「特立のとりたての歴史的变化—中世以前—」『日本語のとりたて—現代語と歴史的变化・地理的変異—』編者沼田善子・野田尚史, pp. 23-43, くろしお出版.
- 渡辺 実 (1990) 「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』23, pp. 1-16.
- 岡崎友子 (1999) 「指示副詞の歴史的考察—「カク」を中心に—」文部省科学研究費研究成果報告書『明治時代の上方語におけるテンス・アスペクト形式—落語資料を中心として—』(研究代表者: 金沢裕之), pp. 107-136.
- 岡崎友子 (2003) 「現代語・古代語の指示副詞をめぐって」『日本語文法』3-2 (日本語文法学会), pp. 163-180, くろしお出版.
- 池上 (岡崎) 友子 (2004) 「古代指示副詞の研究」大阪大学大学院文学研究科平成十五年度博士論文.

資料 (本文中の用例は, 下線を引いた部分で示す)

『万葉集』(万葉集本文篇・各句索引: 埴書房, 本文にあげた用例は新編日本古典文学全集: 小学館を使用した)『日本書紀』(岩波日本古典文学大系)『源氏物語』(小学館新編日本古典文学全集)と, 『土左日記』『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『更級日記』『枕草子』(すべて岩波古典文学大系)『却癡忘記』(岩波日本思想大系)『平家物語』(岩波日本古典文学大系)『延慶本平家物語本文編』(勉誠社)『中華若木詩抄』(抄物大系: 勉誠社)『天草版平家物語』(勉誠社文庫および亀井・阪田『ハビアン抄』キリシタン版平家物語) 吉川弘文館)『邦訳日葡辞書』(岩波書店)『ロドリゲス日本大文典』(土井忠夫訳三省堂)『大蔵虎明本狂言集の研究本文篇上・中・下』(池田廣司・北原保雄著表現社)『近松浄瑠璃集上』『西

鶴集上』『浮世風呂』(岩波古典文学大系)『洒落本大成』(中央公論社)『穴さがし心の内そと』(前田勇『近代語研究』第4集武蔵野書院1974)『二十世紀初頭大阪口語の実態—落語 SPレコードを資料として—』(真田信治・金沢裕之)

(なお、洒落本の資料に関しては金沢裕之(1994)「明治期大阪語の仮定表現」『国語と国文学』71-7・金沢裕之(1998)『近世近代大阪語の変遷』(和泉書院)、矢野準(1976)「近世後期京阪語に関する一考察—洒落本用語の写実性—」『国語学』第107集、同(1976)「近世後期上方語資料としての上方版洒落本類」『語文研究』第41号を参考とし、大阪版京都版のみを対象とした)

〔附記〕

本論は新村出記念財団、平成十六年度研究助成金によるものである。記して感謝申し上げます。